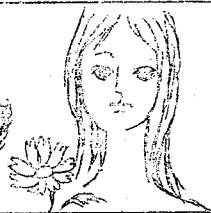


逐次刊行物

'14.10.15

国立女性教育会館
女性教育情報センター

はつらん かん



・1977・9・29・NO.3

私の活動日記より-----田吉チエ会長

○「夏休みというのに、いつお電話しても留守ばかりですね、一体どこで何しているの？」私の友人からお叱りばかり受けています。自分でも何しているのと自問自答したくなる有様ですもの。でも最近朝夕の涼風で ホッとしています。

○目下、地域の母子家庭実態訪問中。朝めし前に行かねばと思う家を目ざして今朝は二戸、7時前に出て8時に帰宅。

出勤に じゃましては と思って気を使うことです。

○9月6日～11日まで 全国婦人民生委員大会に出席の為、旅行していました。群馬県水上町。九州では雨が欲しいと言って出かけたのにあちらでは雨ばかり。帰りの羽田空港では台風のために、長崎着陸は不可能かもしれませんよ、その時は大阪まで帰るかも---と、おどされたのに、大村空港は快適のお天気という始末でした。

さて、お天気はさておき、全国大会は何と1100名という盛会さ、予定を300名上回ると嬉しい悲鳴さえありました。お取っ払いですが長崎県は3名(中1名事務局)、沖縄は30名という前進ぶりです。

その発刺とした活躍ぶりが発言の片ほしにも、うかがわれて、頼もしいことでした。長崎県？これは考えさせられる女の肉題です。

「女性の遠路県外旅行は要なし。全国大会等何故女に必要があるのか」と言う本部(男子)の強硬な方針だということです。ともあれ 今出た 母子家庭部会 は 9時～16時まで 実に真剣そのもの、特に若年母子の就労改善、婦人民生委員の相談面接の地域活動、ボランティア精神に依る奉仕活動の実例等、さすがに代表者の集会として例年の上ではあるが、最後まで研修会場満席という誇り高いものでありました。

精進とは又 集会の所に 仰りまして---。(52.9.22)

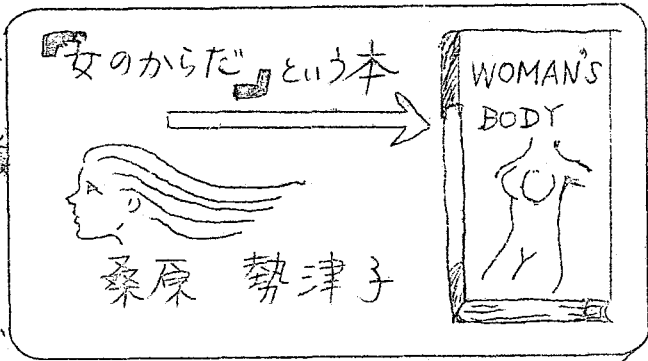
この夏「女のからだ〜女性自身のための手引書」という77年版の部厚い本を買った。ミネアポリスのタウンダウンのヘネボン通り、いちばん本の悪いといわれている角の本屋で。「新しい女性」のコーナーという表示が珍しくて手にした本の中の一冊だった。

1000頁をこえる簡明なイラスト、グラフが入っているのも、良いなと、思った。書いたのは男女数人のグループである。

序文には、こう書いてある。

ここには豊富なイラストをつかって、確かに、まっ正直で、すべての女性のすべての年令の女のからだに、なする傾向について、公平な答がある。

これまであまりに長い間、女性のからだは、神秘とタブーであみわれ、その犠牲になってきた。生理、性、生活、妊娠、更年期、老年は、しばしば恐れと混乱のうちに経験された。



この本の目的は、まっ正直に、公平に、彼女たちのからだの機能について、変化について説明することであるが、もっと複雑な一見横道に、それたようなものも包含した。

専門的な言葉は、ほとんど使わず、すごい数の医学的データを今日的に合成し、わかりやすくまとめた。1000頁をこすイラスト、グラフもそのためである。各パネルは複合参照でき、包含的なインデックスも、たやすく引けるようにした。

この本に含まれているすべての素材は、女性のからだについてとり組んでいる医者グループに提出し、チェックと論評を求めた。

医学的な見解と理論は変るし、お互いによく否定されるので、編集者は偏見をもたないようにつとめ、できるだけ多くの考えをまとめた。素材の送状について、我はもっと専門的

すすんだ本のリストも あげている。

この本の中で「ふつう」「標準的」という言葉はよく使われており 科学的な概観からみた「参照」(対照)という指摘はあるが基本的に、どんな判断や個人的な意見も加えられていない。

それは何か、又は多くの場合 どうなっているかは書いたが何が
必要か、どうあるねばならないかとは書かれていない。

この本は彼女のからだについて、より深い、はつきりした理解を女性自身が知ることにより自信をまし、期待にみちた将来を導くもの、として創作された。

読みにくい直訳だが、ここには あえてこのまま紹介した。
この本を訳してみたい。それだけでなく 私の感想や、日常や、アメリカ旅行でのいろいろなことも盛りこんでみたいと夢みている。

誰か「訳」の協力者 いませんかしら。(52.9.20)

~~~~~  
「女のからだ」の翻訳に協力して下さる方は、NBC (TEL)  
桑原 まで、どうぞ

□□□□□□□□□□

次の例会の あしらせ

◎10月14日(金)

午後6時半より

自治会館 3階にて

桑原 勢津子さんの

「アメリカ旅行

あれこれ」

お誘いあわせて

いらしてください。

□ 一ロメモ:

□ 朝日新聞の婦人記者松井

□ さんよりの中国レポートによると、

□ 中国の革命は3段階(個人の思想

□ 革命→国家社会→家庭の革命)にわけ

□ て考えられ、今は、その3段階、

□ 家事の社会化、分担にあり、

□ 家事は100% 男女の平等な分担

□ になっているそうだ。



# 信州長野の集いから 餅田 千代

無事に終わった向陽寮勤務の28年(うち5年は婦人保護施設勤務)を祝い慰労を兼ねて、関東方面在住の向陽寮出身者達に招かれて長野県穂高に遊ぶ。

去る7月23日午前10時甲府駅前に着いた。バスが最初の集合地。バスの側面に甲府在住の山本興七君が一晩かかって書いたという大きな掲示幕に赤色で「ひまわり会」と張り出している。向陽寮の出身者なら、案内なくとも「あ、これだな」と判るのである。それは昭和24年向陽寮児童会が出来た時、向陽寮にちなみ「ひまわり会」と命名したからである。

やがて集まって来た会員達、「いや、お久しぶり、これが女房で長男と次男」、「僕は長男だけつれて来た」、「私の主人です、こちらが長女と二女です」と、そこで初対面の様な挨拶がかわされ、私には「あ母さん、あ元気で、若いよ、もう、いくつになたかな」などと四方からいたわりとなつかしき声でひとしきり、10数年或は20数年の空白はだんだんに縮まり昔にかえる一時。真夏の太陽はぎらぎらと燃え、経費を節約した無冷房のバスの中は20数年振りに逢う喜びの熱気とともに暑気が充満する。

10時30分、予定の参加者を待って発車。幹事は置泉占夫妻。運転手は山本興七君、これも家族総出である。

山梨県の有名な昇仙峡を見物して、長野県穂高町江戸川区立穂高荘についたのは午後5時。

温泉で汗を流して私のための宴席へ。集まった向陽寮出身者は12名、家族を含せ私を入れて31名。42才から20才までの子供達は私に「あ母さん」アエ世達は「あばあちゃん」

と、呼ぶのである。最年長の竜田君が祝詞と慰労、花束と記念品の贈呈、これに対し私は20年振りに逢えた喜びと感謝の言葉をあぐり、あ互いの健康と幸せを祝って乾杯-----。

その夜は語り明かして、翌24日は黒部溪谷へ。バスの中で私が持ってきたその頃の日記の拾い読みや、思い出話、子供達の歌合戦など、バスの進行と共に楽しい旅行が過ぎていく。

私の30年の子育て生活の終止符は、あまりに恵まれ素晴らしいものでした。私は茲にその喜びを表現する筆舌を持ち合せず、皆様の御想像に託し、昭和23年4月児童福祉法実施されて、恵まれない子供達が幸せも如何に求め得たか、許されるなら、ばってんウーマン紙面をかりて、長野に集まった子供の1人、1人を紹介してみたいと思っています。  
(52.9.25)

正直なところ、  
ばってんウーマンへの  
希望(?)  
太田 博子  
いったい何をなりたいのか、それがよくわかりません。

それでも 魅力ある  
個性の集まりなので、どうも私には、  
会そのものの目標はよく捉えられないけれど、皆さんの  
それぞれの個性を見、聞き、私自身に、必要なものを  
吸収したいものだと思っています。



一ロメモ：秋になりましたネ。

銀杏のカラを割り、シブ皮のまま サラダオイルに  
つけて約1ヶ月してからいただきます。毎日一粒づつ。  
大変元気になるよ。(料理の先生より)

○ 学童保育所の指導員  
として考えること ○

木島 幸恵



「先生、あ元氣ですか、私は先生に怒られる時(先生のバカ)と思うけど、先生は私の為に怒っているのだから、6年生まで来ていいですか。」

こんな素晴らしい20名程の子供達に囲まれて私の1日はすぎて行きます。

×ダカ学童保育所、これが私の勤める所です。

学童保育とは、共働きの子供達が親の留守の間、非行に走らないように、又放課後を生き生きと過

ごせる様にするという切実な願いから生まれたものです。

したがって、その指導員の給料は親達が負担しなければなりません。子供達はランドセルを背あたま、只今と学童保育所に帰ってきます。勉強をさせ、あやつと与え、のびたつめは切り、人として守らねば取ずかしい躰など親にかわて注意もします。今日はあ母さんの仕事が休みだからと言っても、イヤダと言って、保育所に帰ってくる子供達。

使命感? とか、ああげさなものはないけど子供達の期程に添うべく勉強中です。

でも近頃、親との肉題で、今の私は「?」が生れて来ているのも事実です。少ない負担金で子供をみてもらいたいという親の気持ちがまる見え。負担金を少なくというため、市、県に補助金をと、請願中なのですが、いつもしわよせは、私共指導員にやて来ます。

働いている人ばかりなので、私達の立場も理解して頂けると思いますが「保育料が高くなると、どうしてもやめる人もいるのではないか」と言われると、私共は、何一つ言えま

せん。意欲ある指導員を希望するなら、やはり身分保証を  
考えて欲しいと思いますし、働く者同志、もっと話し合いも、  
あってよいのではないかと思います。私自身やめることも考え  
ないでもないし、それにしても子供達に罪はないのにーと、  
頭の痛い此頃です。

この問題、もっと皆様、考えて頂けないでしょうか。  
共働きの強さ(?)で、税金を使用される(市県の補助金)  
のもいいのだけど、私には もっと謙虚さがある請願に  
して欲しいな、と思っています。



(52.9.29)

△編集  
後記  
▽

☆ にぎやかな蝉の聲が、いつか涼しい虫の聲にかわって、  
もう秋。蒼く高くなつた空を見上げると、金木せいの匂いが  
ただよって来ます。幼い頃、この花を覚えてくれた人の面影が  
浮かんで……匂いにも、それぞれ思い出があるものです。

☆ 丸木俊の「女絵かきの誕生」(朝日選書93)と、松  
谷みよ子の「ふたりのイタ」(講談社)を読んだ。  
夫々広島の実爆をテーマにしたもので、両者に共通する  
ものがあり(長崎の実爆は、いま……)と思うと、何とか  
しなければ、という思いにつき動かされる。

★ 太田さんからぼてんウーマンとは?という疑問が出され  
ましたが、皆様は、どうお考えでしょうか。  
一口に女の問題といっても、生きてきた年代、環境、仕事に  
よって、かかえている問題は1人1人異なります。会報に、夫々の  
考え方や問題提起をして、皆様に考えて頂いている内に  
何か一つの方がみつかっていくのではないかと、私には考えま  
す。その意味で、今何を考え、何をしているか等、皆様の投  
稿を、お寄せください。(担当: 鶴 初美)

ぼてんウーマン会事務局 長崎市 松崎澄子